

古代の枚方ひらかたと百済

百済の会 狩野輝男

枚方には、古代に百済との関係が深かったことを示す歴史的なモニュメントが3つある。王仁墓、楠葉宮跡、百済寺跡で、これらについて百済との関係に触れながら説明を試みたい。その前に「枚方」について簡単に述べておく。

1. 枚方とは

枚方は大阪と京都の中間にあり淀川左岸に発展したところで、現在は約40万人が暮らす大阪の中堅都市である。交野台地かたのと枚方丘陵の間を天野川が流れ、古くから人の住みやすい土地であった。旧石器時代から近世に至るまでの多くの遺跡が点在している。

枚方をヒラカタとは読み難いのだが、戦国時代や江戸時代の武将にも枚の字をヒラと読ませる名前が見受けられ、昔は一般的な読み方だったようだ。地名の由来としては次のような説が見られる。

白肩の津

古事記や日本書紀に、神武天皇が東征して潮流の早い難波を過ぎ、川を遡って波静かな「青雲しらかたの白肩の津」に上陸したと記されている。この白肩が枚方であるという。シはよくヒに転換するので、シラカタがヒラカタになった。天之川（天野川）が淀川に注ぐ川口に白砂の干潟（白潟）が広がっていた。白潟に白肩の字が当てられた。

新羅の肩

交野台地や枚方丘陵には古くから渡来人が多く住み着いたと考えられる。特に新羅の人の多く住む台地という意味で「新羅肩」と呼ばれたのではないかと言う。わが国では新羅をシラギと呼ぶが本来はシラである。肩は山の下に広がる台地を表し、枚方丘陵は正に肩と呼べる地形をなしている。

アイヌ語のピラカタ

アイヌ語でピラ（pira）は「崖」、カタ（kata）は「上」を表し

ていて、ピラカタは崖の上ということになる。淀川を遡ると右手に生駒山系から続く枚方丘陵があって、今でも約40メートルの高さの崖が見られる。現在の枚方市はかなり広域になっているが、古代では枚方の名はこの丘陵附近を指していた。ピラカタがヒラカタになった。アイヌ語の地名は各地に残っているので、この説はかなり有力と思われる。

比羅寄駄

日本書紀の継体天皇条に近江臣毛野の妻がその死を悲しんで詠んだ次のような歌が載せられている。「比羅寄駄（ひらかた）ゆ 笛吹のぼる 近江のや 毛野の稚子い 笛吹のぼる」。これがヒラカタの名が文献に現れる最初だが、6世紀初めの頃にはヒラカタの地名があったことを裏付けている。播磨風土記には「平方」という字が登場する。

交野郡とモニュメント

古代では枚方市の全域が河内国^{まんだ}茨田郡に属していたが、大宝2年（702）に天之川から北の台地は交野郡として分離された。3つのモニュメントはすべてこの交野郡に存在する。

古代の半島には百済・高句麗・新羅が鼎立した三国時代があり、その三国間で激しい抗争を繰り返し、そのために多くの人々が列島へ渡来した3つの大きな時期があった。モニュメントはそれぞれこの3つの時期に対応している。

- ・王仁墓 渡来の第1期 4世紀末～5世紀初
百済が高句麗に圧迫され漢江以北を失った時期
- ・樟葉宮跡 渡来の第2期 5世紀末～6世紀初
百済の都漢城が滅び新都^{うんじん}熊津で南下を図る時期
- ・百済寺跡 渡来の第3期 6世紀中葉～7世紀中葉
百済が新羅・唐と抗争し滅亡した時期

2. 王仁墓

枚方市藤阪東町に応神天皇の招きで来日した王仁の墓と伝えられ

ているところがある。墓碑の周辺も整備されて、韓国からも多くの人が訪れている。

王仁墓の由来

藤阪に古くからオニ墓と呼ばれた自然石があり、霊験あらたかなものとして崇敬されていた。王仁



の子孫を自称した枚方禁野和田寺の僧道俊が、元和2年（1616）に「王仁墳廟来朝記」を著し、オニ墓は王仁墓の訛ったものであると主張した。享保16年（1731）に京都の儒学者並河誠所が「五畿内志」という名所案内を書き、その中でこの説を追認した。そしてこの地の領主久貝因幡守正順に墓碑建設を進言し「博士王仁の墓」の碑が建立された。昭和12年（1938）にこの地の村長が大阪府に史跡指定を申請、翌昭和13年に大阪府は「伝王仁墓」として史跡第13号に指定した。

一方韓国では1976年に全羅南道霊岩郡鳩林面聖基洞を王仁生誕地と定め、「王仁廟」を建設して王仁の顕彰が行われている。枚方市とこの霊岩郡との親善が進められている。

王仁の渡来

百済は近肖古王（340－375）の時代に最盛期を迎え、倭国とも友好関係を結ぶが、その後高句麗広開土王によって漢江以北の地を失う。南に目を向けた百済は倭国と連合して新羅を攻め、これに高句麗が介入して戦乱が拡大する。この時期のことは有名な広開土王碑文によって推量されているが、神功の新羅出兵という日本書紀の記述もこの時のことである。戦乱を背景にして多くの人たちが列島に渡って来た。秦氏が百済120県の民を率いてやって来たのもこの頃である。

応神15年に百済から阿直岐^{あちき}が渡来して来た。阿直岐は馬飼でありまたよく経書を読んだので、応神は太子菟道稚郎子^{うじのわきのいらつこ}の師とした。応神が「お前よりも優れた学者がいるか」と問われたのに対して阿

直岐は「王仁というすぐれた人がいます」と答えた。そこで応神は百済に荒田別らを遣わして王仁を招聘し、王仁は論語10巻と千字文1巻を携えてやって来た。千字文は南朝梁の武帝時代（502－549）に周興嗣が編纂したものが有名だが、魏（220－265）の鍾孫による千字文が前に存在しており、王仁の携行したのはそれだったと考えられる。

菟道稚郎子

皇太子菟道は王仁を師として諸々の典籍を学び、すべてによく通達していたと日本書紀は記す。応神には皇位継承の有力候補として大山守命、大鷦鷯命（後の仁徳）菟道稚郎子がいたが、応神はいちばん下の菟道を皇太子に立てた。菟道の母は宮主宅媛で、その父はわにひふれのおみ和邇日触使主である。使主というのは阿知使主の例のように渡来集団の長と考えられる。菟道はこの母のもとで王仁の学問を受け入れる素地を養った。王仁の講義は百済語で行われたであろうから、菟道は百済語を理解したのだ。百済の血を受けた応神が宮主宅媛を寵愛し、その子菟道を皇太子に立てたものと想像できる。

因みに応神は百済うんじん熊津（忠清南道公州）から来たとの説がある（金容雲氏「日本＝百済」説）。熊津は応津とも書き応神の名はそれに連なっている。神功が半島に出兵するとき既に懐妊しており出産を遅らせるために石を抱いたと日本書紀は記している。しかしこれは応神を仲哀の子とするため、即ち天皇家が一系であるとするための作為であることは明らかで、応神が神功と共に百済から渡来した王族であると推論することもできる。そうすれば応神は当然百済語を話し、王仁とも自由に通じたことになる。

応神の立てた皇太子菟道稚郎子は兄に皇位を譲るために自殺し、大鷦鷯が立って仁徳天皇となった。これも興味深いテーマだが、本論から外れるので割愛する。

辰孫王

続日本紀延暦9年条に、津連真道が桓武天皇に奏上した言葉がある。「応神天皇は、上毛野氏の遠い先祖である荒田別に命じ百済に

使いさせ、有識者を招請させました。国主の貴須王は申し出を受け入れて、一族の中から人材を選び、孫の辰孫王を派遣しました。天皇はこれを喜ばれ、皇太子の師とされました。こうして初めて中国の典籍を日本に伝え、大いに儒教の学風をあきらかにされました。

(一部省略) (宇治谷孟氏訳による)

これは、応神15年の王仁来朝の出来事と全く同じ内容なので、王仁即ち辰孫王ということになる。金達寿氏は「王仁とは朝鮮語のワンニム(王任)で、これは王様ということに他ならない」と述べている。王仁は王族であるということである。辰孫王の子孫は河内国藤井寺や柏原辺りに住んだが、その柏原に松岳山古墳というのがあり辰孫王の墳墓と言われている。辰孫王が王仁であるならそこが王仁の墓ということになるが、これも伝承の域を出ず、直ちに藤阪の王仁墓を否定するものではない。

因みに、辰孫王という名は古朝鮮時代に半島南部にあった「辰国」を連想させる。辰国はやがて馬韓・弁韓・辰韓に別れるが、馬韓目支国の王が辰に君臨した。馬韓は後に百済の地となるところで、辰王族の勢力が百済にも及んでいたことが考えられる。辰孫王とはそのような勢力の子孫ということになる。

3. 楠葉宮跡

枚方市楠葉丘に交野天神社の小高い丘があり、そこが継体天皇楠葉宮跡と伝えられている。この丘の麓は、木津川と桂川が淀川に合流する地点で、対岸には天王山が迫っていて、交通や戦略上の要衝だったことを忍ばせる。



継体天皇の即位

応神から始まった河内王朝は武烈で途絶えた。武烈には子がなく後継者がなかった。有力豪族大伴、物部、蘇我らが相談して白羽の

矢を立てたのが越前の男大迹王^{おおどのおう}で、応神5世の孫と言われ、釈日本紀には上宮記の記述としてその系図が挙げられている。誉田天皇（応神）一稚野毛二派皇子一意富々等王一彦主王一男大迹天皇（継体）である。

父の彦主王は近江国高島郡三尾の豪族であり、母の振姫は垂仁7世の孫と言われ越前坂井高向の出身である。彦主王が早世したため振姫は幼い男大迹を連れて越前に帰り、男大迹はそこで成人した。男大迹王はその妃に尾張連草香の娘目子媛がいて、近江から尾張に及ぶ大きなネットワークを持っていたことが考えられる。

大連大伴金村が越前に赴いて男大迹王を招請するが、その時仲を取り持ったのが河内馬飼首荒籠^{あらこ}だった。その名の通り河内の馬飼の首領である。馬飼は馬を飼育するだけでなく運搬業者であり、万のときの戦闘要員でもある。荒籠という名は、半島伽耶の一国である「安羅の人」という意味を示している。安羅はいわゆる任那日本府があったところで倭人も多くいた。荒籠は、日本海を挟んで半島と交易していた男大迹王と旧知の仲だった。また、振姫の里高向には多くの古墳があって、その出土品から半島との交流が深かったことが知られている。

男大迹王は河内国交野郡葛葉（楠葉）に進出しそこで即位の礼を行った。楠葉は、木津川を遡って奈良山を越えれば大和に入り、巨椋池^{ぐら}（今は干拓されて田園が広がる）から山科を通り琵琶湖を經由して越前につながり、淀川を下り瀬戸内海を通って筑紫に至り、半島へと通じて行く交通の要衝に当たる。この地を熟知している荒籠が、自らの勢力下にある楠葉での即位を進言したものと思われる。

継体の遷都

継体が即位したのは507年のことで、武烈の妹である手白髪媛^{たしろかひめ}を娶って皇后とする。これも皇統が一系であることを言おうとするための日本書紀の作為かも知れない。

即位して4年目の511年に継体は都を筒城宮に移す。楠葉から南へ山を一つ越えた地点で大和へ一步近付く。ところが7年後の5

18年には乙訓宮に遷都する。一転して大和から遠ざかるのだがここは水運の便のよい土地であった。当時の半島状勢を睨んで、継体は大和よりも半島対策を優先させたのである。

百済ではわが国で生まれたと言われる武寧王の時代だった。新羅が伽耶に進出し、百済は南下政策を取る高句麗に圧迫されて自らも南下を図るが、それにより伽耶を挟んで新羅と対立することになる。512年、百済はわが国に対して任那（伽耶）4県の割譲を求めた。ここは百済に接する蟾津江の西側の広い地域だが、継体は大伴金村らの意見を入れて百済の要求に応じる。更に513年に、コモン・タサの地を百済に譲る。ここは蟾津江沿岸の要衝の地で、伽耶の伴^は跛^へ国は強く抗議するが継体は聞き入れなかった。強力になってきた新羅に対抗する政策として、継体は伽耶よりも百済を選んだのである。因みに金容雲氏は継体を百済蓋鹵王の弟の昆支であると見る。もしそうならば継体が百済寄りの政策を取ったことは容易に頷けることになる。

五教博士

継体が百済に便益を図った見返りに百済は五経博士段楊爾を送って来た。継体は百済を利用してわが国の文化の発展をも画策した。楠葉、筒城、乙訓に戦略的拠点完成させた継体は、最後に文化の拠点である大和に宮を造営する。即位して20年、やっと大和入りし磐余玉穗宮を定めた。玉穗という名に文化の香を感じる。倭の五王（河内王朝）は中国南朝から冊封されることを望んだが、継体はこれを脱して国際的に通用する国力の実質的向上に力を注いだ。新しい国の形が継体によって誕生したと言われる所以である。

近江臣毛野

「継体21年（527）6月、近江臣毛野が兵6万を率いて任那に行き、新羅に破られた南加羅を回復させようとした。このとき筑紫国造磐井が、ひそかに反逆を企てたが、事のむつかしいのを怖れて隙をうかがっていた。新羅がこれを知って磐井に賄賂を送り、毛野の軍を妨害するように勧めた。」と日本書紀にある。これを知っ

た継体は物部^{ものべの}麩鹿火^{あらかひ}を大將軍として磐井を討たせ、528年麩鹿火は磐井を切り反乱を完全に鎮圧する。新羅と結んだ磐井を倒して継体は百済との関係を深める。

継体はあらためて毛野を安羅に派遣するが交渉は失敗に終わる。継体により召還された毛野は帰国途中で病死し、その亡骸を積んだ船が淀川を遡って近江に向かう。その時に毛野の妻が詠んだ歌が日本書紀に記されており、そこにヒラカタという言葉があることは前述の通りである。

4. 百済寺跡

枚方市中宮西之町に国指定特別史跡「百済寺跡」がある。国指定特別史跡は大阪府では大坂城址と百済寺跡の2つだけだが、大坂城址が広く知られているのに対し、百済寺跡は殆ど知られていない。これをもっと顕彰しなければならないと、2001年に活動を開始したのが「百済の会」である。百済の会主催で毎年5月第2土曜日に行われる「枚方 / 百済フェスティバル」は、現在では枚方市教育委員会と枚方文化観光協会が主催者に加わって盛大に行われるようになった。



特別史跡指定の経過

7世紀末に百済王氏一族が氏寺として建立した百済寺は、その伽藍は消滅したものの、寺跡が奇跡的に保存されてきた。昭和7年（1932）に大阪府史跡調査委員会が調査したところ、薬師寺式の伽藍配置で主要な堂塔の遺構がよく残されていることが明らかになった。昭和16年（1941）に寺域一帯が史跡に指定され、昭和27年（1952）には、造営氏族がはっきりしている数少ない寺院であり、百済王氏の歴史的背景と相俟って、日本古代史における日朝文化交流の史実を徴証する遺跡として特別史跡に指定された。

昭和40年（1965）に史跡公園として整備されることとなり、発掘調査が実施されて主要伽藍の基壇を立体表示するなどの整備が行われた。その後40年が経過して再整備が必要となり、これを機に平成19年（2007）から再度発掘調査が行われた。その結果新しい事実が次々に発見され、当時の官寺に見られる最高の技術を駆使して造営されたことが明らかになった。百済寺が別格的な存在であったことが証明され、特別史跡としての価値を高めている。

百済王禪広

百済は660年に新羅・唐の連合軍と戦って滅ぼされる。その時の百済の王は義慈王で、一時新羅を攻めて百済の勢力を伸張させるが、わが国との連携を強めるために王子豊璋と禪広（善光）を送って来ていた。

百済では鬼室福信らにより復興運動が起こされ、豊璋は王に推戴されて半島に帰る。わが国は斉明天皇と皇太子中大兄皇子（天智）が百済を救援するために派兵して新羅・唐と戦うが、白村江の戦いで大敗して百済復興運動は終焉する（663年）。これによって百済から多くの人々が亡命し渡来してくるが、わが国に残っていた王子禪広は天智によって摂津国難波に土地を与えられた。大阪市天王寺区や東住吉区には百済の痕跡が残されている。禪広は後に女帝持統から「百済王^{くだらのこにきし}」の氏姓を与えられる。

百済王敬福

禪広の曾孫に当たる敬福が陸奥守となった天平15年（743）、聖武天皇が大仏建立を詔する。百済からの渡来人が多くの寄付を集めて建てた河内の知識寺がモデルで、聖武もまた多くの寄進によって大仏を建立しようとした。聖武の命を受けた僧行基が勧進に活躍するが、行基もまた王仁を祖とする高志氏の出身で、百済に関係ある人物である。大仏建設は順調に進んだが、仕上げに使う黄金が不足していた。その時敬福が陸奥国涌谷で産出した黄金九百両を献上する（749年）。九百両は約13.5kgに当たり、大仏に必要な黄金の20%程度に過ぎないが、聖武は大喜びし敬福を従三位に

昇進させ宮内卿河内守に任じる。

大仏の仏師はくになかのむらじきみ まろ国中連公麻呂で、その祖父国骨富は百濟滅亡の時亡命してきた人である。敬福がタイミングよく黄金を献上したのには、この公麻呂の策謀があったものと考えられる。大仏殿の建設を指揮したのはいなべももよ猪名部百世で、やはり百濟からの渡来人の末裔である。こうしてみると大仏殿は百濟からの渡来人によって作り上げられたと言わざるを得ない。

百濟寺建立

敬福が河内守に任命されて百濟王一族をはじめ百濟の人たちが摂津国百濟郡から河内国交野郡に移住した。それが現在の枚方市中宮である。そこに移住した百濟王氏は新しく町を造り上げ、それと共に氏寺として百濟寺を建設したのである。

発掘調査によって百濟寺の建設は8世紀後半と見られるところから、敬福が河内守になると同時に発願しその死亡（766年）の後に建設が進められ完成したものと考えられる。大仏殿が完成する時期と重なっており、百濟寺は大仏殿を造った技術者たちが建設に協力したことが想像される。このことによって官寺に匹敵する極めて質の高い百濟寺が完成したのだった。

桓武と百濟王

百濟寺跡の一角に百濟王神社があり、その鳥居の脇に「桓武天皇行宮址」の碑が立っている。百濟王敬福の孫娘にみょうしん明信がいて、その夫右大臣ふじわらつぐただ藤原継縄の別業が交野にあった。交野の地を12度に亘って訪れている桓武は、そこを行宮にしたものと思わる。明信は桓武の寵愛を受けてないしのかみ尚侍となり、一族の多くの女性を桓武の後宮に送った。百濟武寧王からの血を受け継いでいる桓武は、百濟王氏を「朕が外戚なり」と呼んだ。その強力な関係は嵯峨・仁明の時代まで及ぶが、藤原北家の勢力が強まると共に衰退して行く。

徐々に後ろ盾を失った百濟寺は維持が困難となり12世紀頃にはその姿を消したが、その痕跡はしっかりと残されたのである。